





## 「カナダ子育て支援及び子どもの人権視察研修旅行 2013」

NPJ 認定トレーナー 柴田 静寛

私は今年（2013年）の5月に「カナダ子育て支援及び子どもの人権視察研修旅行 2013」（9日間）を企画して8人の方とトロントとバンクーバーを訪れました。今回は子育て支援を大きな視点から見る事ができたので、その一部をお伝えしたいと思います。

トロントでは市の保健局の担当者から就学前のプログラムについてうかがいました。市では生後間もなくから就学前までの子どもを持つ親に対して切れ目のない4つの公式プログラムをもっており、その一つがノーバディズ・パーフェクト（以下NP）です。2012年は70回のNPを行い835人が参加し、全体の約3割を英語以外の言語でも行いました。基本的には8回を1シリーズにして、NPの中では学んだことをロールプレイする、子どもの健康を守る方法を動作で表して考える、家で挑戦することをFAを巻き込んで行うなどの工夫をしていました。カナダ全国の調査によると、NPには肯定的なやり方を学ぶ、親子の信頼関係が増える、地域の支援を受けることができるようになる、ストレスへの対処能力が向上する、解決能力が強化されるという効果があるようです。これは私たちも実感できる部分があるのではないのでしょうか。

オンタリオ州教育省からは幼児教育、学校教育について説明があり、すべての子ども達にとって安全で安心できる学校になるように、いじめの問題を含めて改革をしているそうです。さらには、幼稚園から高校までの教育を一時的な詰め込みではなく、子ども達が自分で考えるような教育を目指して改革に取り組んでいました。そのために子ども達に遊びを大切にしたい学びや質問をして考えさせる方法を採用して、教育効果を上げていました。オンタリオ州での就学前の子どもを持つ親への支援と幼児を含めた教育の背景には子ども達や親を主人公にする視点があると感じました。

次に就学前の子どもと親へのサービスを行っている施設についてお伝えします。1箇所目はトロントのチルドレンズ・ストアハウスで、北米全体でも長い歴史をもち、子どもと親や祖父母などがいつでも自由に来て遊んでいける所（ドロップイン）です。人は大きくなると管理されることが多くなるという理由で、意図して特定のプログラムを持っていません。施設内には様々な玩具やアート（お絵かき等）などの道具が整備されて好きなものを使えるようになっています。1日25～40人の親とそれ以上の子どもが利用していて、親の相談にのることもあります。利用している人が家族のようにし、お互いに支え合えるように仲間のサポートを大事にしています。周りで困っている人がいるとこここの利用を勧められることもあるようでした。

もう一つは、バンクーバーのサウスバンクーバーファミリープレイス（SVFP）でドロップインとプリスクールを運営しています。訪問当日はドロップインに訪れている親子が先生のリードと一緒に歌を歌ったり、歌の中で動物を覚えることができるような活動をしていました。ドロップインでは、親に対する教育も行い、低所得者もいるので衣服やベッドなどを用意して希望者は持って行けるサービスもあります。また、支援に届かない親のためにボランティアを育成する事業を行い、気になる親に声をかけてSVFPについてもらうようにしています。このように施設毎の特徴はありますが、2つともサービスに届かない人への工夫をしており、日本でも参考になりそうです。



以上のように、子どもを育てている親への支援や教育の背景を垣間見ることができたことは、私たちの課題を発見することにつながる貴重な視察でした。

最後に、この企画の実施にあたりCFRCから多大なご支援をいただいたことに感謝申し上げます。



## 増加傾向にある離婚・再婚家庭の子どもたちと「レインボウ」

レインボウ・ジャパン代表 櫃田 紋子

「レインボウ」の創始者スージーさんが逝かれてから早、1年が過ぎました。その間スージーさんの遺志を日本の子どもたちに繋いでいきたいという皆様方のご厚意と参加の方々のご協力をいただきながら、小中学生版プログラム（レインボウ）や彼女が特別な思いで提供してくださった自然災害版プログラム（シルバーライニング）を継続して実践することができました。


レインボウは、親の離婚や離別・死別、虐待など喪失体験やつらい出来事で傷ついた子どもと、当事者である親をサポートするための心のケア・プログラムですが、スージーさんを日本にお招きして、プログラムを導入した2000年当時の日本は、離婚やひとり親ということばを否定的なイメージでつかう人が少なくありませんでした。したがって一般家庭の子どもたちにこのプログラムを実施することはかなり難しい社会状況であったとおもいますが、この10数年間に離婚に対する意識、価値観は大きく変化してきました。

現在では離婚を容認する人は非常に多くなっており、日常よく聞かれることばになりました。実際、離婚件数は年間約25万～27万件にのぼっています。3組に1組の結婚が離婚に至るといふなかで、その約40%は婚姻期間5年未満の人たちです。しかも年代別離婚率をみると、男性は20～24歳、女性は10歳代と若年期で最も高くなっています。乳幼児を抱える子育て期に離婚する人たちが増えているという離婚状況がうかがえます。そして離婚・再婚家庭が増加してきているとともに、ひとり親家庭（母子・父子）も急増しています。さらに東日本大震災から3年経った現在も不安定な生活を余儀なくされている状況のなかで「震災離婚」という痛ましいことばが聞かれるようになってきました。このような家族の変動は子どもたちの心にさまざまな影響を与えていることが容易に推測できます。

昨年の日本心理臨床学会第32回秋季大会では、大会委員会企画シンポジウムで初めて『離婚・再婚家族と子育て支援』をテーマにして一般公開で開催され、子どもの生活や精神状態にどのような変動が生じているのか、どのような解決策があり得るのか等について問題提起されました。児童・教育相談の現場では最近、離婚・再婚家庭の子どもに関する相談が増えてきており、環境の変化に伴う子どもの不安などは、授業妨害、先生への反抗、暴力や衝動的な行動、不登校、発達障害の疑いなど、さまざまな不適応な行動で現れているということです。また日本の離婚制度は欧米諸国と比較すると非常に遅れていて、漸く2011年に夫婦が離婚しても互いに協働して子どもを育てるという養育制度や面会交流が民法に明記されたが、義務付けられていないため依然として「夫婦の別れが親子の別れ」ということが多々起こっていることや、「片親疎外」-子ども自身が片方の親の影響を受けて、別居親に対してつよい拒絶反応を示す（青木聡2013）が問題を深刻化させていること等々、解決されなければならない課題が提示されました。そして離婚をきっかけに生じるこれらの問題に対してどのような心理的援助ができるのか、家族療法の立場（亀口憲治）から、「家族療法」を活かした心理的援助の実際と多様な技法について提言されました。

今後、離婚・再婚家庭やひとり親家庭が増加傾向にあることを考えると、子どもに問題が起きてからの対応でなく予防的な対応がますます重要になるとおもいます。離婚など喪失に伴う感情は大人も子どもも同じように生じるので、親の離婚によって子どもの心も傷つきます。ただ子どもはその意味を理解することや、感情の表しかたや現れかたが年齢によって異なります。こうした点を踏まえて年齢に応じた対応が望まれます。

レインボウは、同じような経験をもつ子どもたちが、ファシリテーターによって安全を保障された小グループの場で、仲間といっしょに喪失に伴う感情を共有しながら、それを乗り越え、自己肯定感を高めていくためのピアサポート・プログラムです。私たちはこれまでこのプログラムの実践を通して、現在の心のケアとともに将来の問題を予防するプログラムとして非常に有効であると考えてことができました。ぜひ子どもや親子に関わる支援者の方々に関心をもっていただき活用してほしいと願っています。



～書籍のご案内～

**シングルシンフォニー  
ひとり親のための  
心のガイド**

親の離婚等で心のケアが必要な子どもたちのために書かれた冊子。アメリカ・スージー・マルタ著の翻訳。

ご注文はCFRC事務局まで



## 「13年目のレインボウ」

プチ里親レインボウ代表 越智 三佳

今年度は子山ホームと一宮学園の2児童養護施設で合計14人の小学4年生が3人のボランティアさん（ファシリテーター）に見守られてレインボウを進めています。お蔭様で2000年の初回以来、参加した子どもは159名、ファシリテーターさんの延べ人数は39名となりました。手探りで始めた活動が、ここまで続けてこられたのは全くにファシリテーターさん方の献身と、児童養護施設のご理解があったからです。何よりも、まずそのご協力に心からの感謝を申し上げます。

どちらの施設でも「4年生になったらレインボウがあるんだ。」と子どもたちが言う位に、レインボウがあるのが当たり前になってきましたが、それにつれて、グループ中の子どもの繋がりが施設の全体に広がってきたように感じています。行事等でお邪魔すると、のっぴの高校生に成長したレインボウの卒業生がわざわざ会いに来て、「僕の時はオジサンと一緒にだったよ。」と懐かしそうに話してくれますし、また、社会人になった子どもたちとも付かず離れずの付き合いが続いています。これまでは外部の大人にお願いしていた遠足のお手伝いですが、来春はレインボウ卒業生たちをお願いすることで、子どもたちの横の繋がりを縦の繋がりに発展できれば嬉しいことと考えています。

東日本大震災からもうすぐ丸3年となります。最近、子ども達が不安定になっていると岩手県や宮城県で被災した方々から聞きました。原発の事故収束のめどが立たず、地元を離れ未だ住む所が定まらない大変な状況下の福島県の人々も多くいます。

郡山市震災後子どものケアプロジェクトのマネージャーおよび政府復興推進委員会委員を務める菊池信太郎医師は、震災直後から子どものケアに精力的に取り組んでいます。菊池氏は「日本の子どもたちの真の復興は福島から！」の中で“東日本大震災で福島の子どもの生活環境が急変し、肥満や運動不足による体の変化が起きている。県内でも個々の家庭状況により異なる影響が生じ、その対策が非常に複雑化し水面下に持続する心の問題を抱えている”(NEWS LETTER of FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会 2013年 Vol. 22)と報告しています。被災の多少にかかわらず、それぞれの地域において人の数だけ異なる課題があり、その対応も多様性が求められます。

2011年の地震と原発事故で全町移転を強いられた福島県大熊町の小学2年生への3年目のサポートが2013年11月に無事終了しました。最近では、会津若松市からいわき市への転居者が多く、小学生は毎年クラスの友だちとの別れを経験します。4月にクラスが決まったら一年間一緒という当たり前のことを今の熊町の子ども達は経験できません。2011年、2012年にスマイルタイムに参加した111名の児童は2013年末現在60名です。2年間で実に半数程の友だちが転校しました。この実情一つをとっても、子ども達がいかに変化する環境下にあるかがわかります。医療の現場で菊池氏が直面している実状と考え合わせると、子ども達に一日でも早く、安定した安全な環境を提供したいと思います。

NPOとして、少しでもサポートをしていきたいとの思いで歩んだシルバーライニング(SL:通称スマイルタイム)の3年間の活動を振り返ってみようと思います。震災直後の2011年は、災害のショック状態の中で、スマイルタイムのマニュアルに沿って忠実に実施しました。同じ福島県内のNPO法人ココネット・マムを通してのサポートでした。予測しなかった事態とどのようになるかわからない不安を抱え、仲間と一緒に場を共有することは一瞬であれ心のザワツキが収められる経験を、かかわった皆がしました。スマイルタイムでは子ども達が学校の授業とは別な姿を見せてくれました。

大熊町とは異なる気候の会津若松市で一年間過ごした2年目は、常に震災と関連してしまう日常の生活から離れ、楽しい経験を子ども達にしてほしいとの願いがファシリテーターに湧いたように思います。1年目のスマイルタイムと比較すると、楽しめる要素を入れた内容に改訂しました。放射能の心配のない松ぼっくりを準備してくださった大熊町社会教育委員の泉さんと子ども達は作品も作りました。それが思いがけず親子の会話を生むことになりました。ファシリテーターの方たちの“自然の多い大熊町を忘れてほしくない”との思いに支えられての活動でした。

そして3年目の2013年度は、楽しくスマイルタイムをやるのでよいのだろうか?とのファシリテーターの反省を踏まえ、大熊版プログラムを作成しました。スマイルタイムの根幹からはずれず、しかし、変化する実情に合わせてつもの、できるだけ高い効果になる内容に毎年少しずつ改定をしています。今年度のスマイルタイム最終回には、感動的な出来事がありました。ファシリテーターにお礼をしたいとの子どもの思いを担任の先生が受け止めてくださり、クラス全員で「ありがとうございました」の一字一文字に言葉を添えた11枚の絵を描き教室に飾って(P5に写真を掲載)、ファシリテーターを迎えたそうです。このように、自発的にそれぞれの優しさや力を発揮し地域の人の温かい交流が生まれたことに、リソースセンターの私たちも勇気づけられました。「楽しかった」「どうして、もう終わっちゃうの?」等の子ども達のつぶやきに私たちは喜びをもらいつつ続けています。そこには、支援する側と支援される側を分ける考えではない、人と人の対等なかかわり方を子ども達が示してくれたように思います。

これまでの実践でスマイルタイムの短期的な効果は、ある程度確信を得ています。子ども達を支えたいという同じ地域の方々の熱い心が良い結果を生んでいる一要因と考えています。本プログラムが自然災害時の心のサポートプログラムとして、臨床心理学の視点から検討していただく機会として第32回日本心理臨床学会(2013年8月:横浜バシフィコ)にて発表しました。指定討論者である立正大学小澤康司先生より、次のようなご意見を頂きました。「スマイルタイムは遠隔地に避難した被災者を対象とした、遠隔地からの個別カウンセリングではないグループでの心のサポートである、このような支援ではスマイルタイムのようにプログラムの枠組みを持っていることが重要であること。その上で、①行政の縦割り等の弊害がある中で、災害後支援の連携をどのようにしていくか ②支援を撤収するときに、何を残していけるかを考慮する等が課題である」これらのコメントを受け、今後の活動の配慮点を明確にできたように思います。

大熊町教育委員会教育長武内敏英先生のご理解を頂き、2014年度も継続することになりましたが、転居等で減少するファシリテーターの確保等の新たな課題も出てきました。今まで同様試行錯誤しながら、ファシリテーターの皆様と共に歩みたいと思います。



これまで活動を支えてくださった皆様に感謝申し上げます。震災直後からSLファシリテーター兼コーディネーターとして3年間一緒に活動をしてきた夏目陽子さんも転居します。夏目さんに3年間のスマイルタイムへの思いをお寄せいただきました。



## 「地域の子ども達を支えて」

夏目 陽子

事の始まりは、一本の電話からだった。「お願いがあるのだけど、一緒に東京の子ども家庭リソースセンターという所へ行って、話を聞いてもらいたい。行ってくれる?」私は、「いいですよ。」と軽く返事をした。電話は、震災の年、平成23年の7月に、当時、大熊町役場職員で幼稚園教諭の酒井和枝先生からのものだった。彼女は娘と息子が幼稚園の時の担任で、卒園してからも交流があり気心の知れた方だったので、すぐに返事をした。これがこの活動に参加するすべてののはじまりだった。

その年の8月、東京でレインボウプログラムの中のシルバーライニングの説明を受け、10月にはスタートさせるため、ファシリテーターとして共に活動できる人を募らなければならなかった。自分も活動内容をよく理解していないのに、人に説明し賛同してもらえるか、人数が集まるかということが心配だった。人数を集めるということで最初に思いついたのが、震災当初、小学校での本の整理に携わってくれた人たちだった。

震災で4月に会津若松市へ避難して、ボランティア活動を始めのきっかけとなったのが、町の教育長の武内氏から「本の整理が先生方では手が回らないので、図書ボランティアで協力してはもらえないだろうか。」という依頼だった。図書ボランティアというのは、震災前に大熊町内には2つの小学校があり、それぞれ読み聞かせの図書ボランティアグループがあった。今まではほとんど交流がなかったグループのメンバーが連絡を取り合い、元のメンバーよりは少なくなりましたが、志のある方も加わって、震災後1つの図書ボランティアとして活動を開始した。その活動の内容というのは、全国から大熊町の小学校に寄付などで集まった膨大な量の本の整理だった。約1か月かけて毎日雑談を交えながら、終わりの見えない作業を続け、メンバーと心の交流を深めていった。このような経緯があり、声をかけたら皆、快く引き受けてくれた。

9月になり、その図書ボランティアメンバーに内容を軽く告げ、ファシリテーター養成講座に参加してもらった。メンバーは訳が分からず、朝から夕方まで1日かけての講座を受けていた。本来は数回に分けての講座らしいのだが、時間がなく1日に集約されたものだった。皆初めての用語や内容だったので、「疲れた」の一言に尽きた。

それからは週2回メンバーと集まり、ファシリテーター役と子役に分かれ、マニュアルに沿ったストーリーを作り、セリフを考え時間も計りながら練習した。スムーズに進められるか、楽しく過ごせるか、マニュアル通りに行くかなど悩むことが多く、そうこうしているうち10月になりシルバーライニングの活動・スマイルタイムが始まった。テキストに使われているジャーナルの絵や、翻訳されている言葉など、幼児用に書かれてはいるが、理解しにくいことが多かった。そのため、その都度皆で内容について話し合いながら、工夫してテキストを使用した。

その後1グループ5人の8つのグループが出来た。子どもたちに親でも先生でもなく、叱らない大人が、その時間だけは自由にさせてくれるので、子どもたちのパワーには凄まじいものがあった。奇声を発する者、隣のグループにちょっかいを出す者、大声で話す者、まるで動物園のようだった。この活動は、子どもたちが震災での喪失や環境の変化について、自分の内側の普段は表に出さないような感情をストレートに表現するサポートを目的としたものだったが、マニュアル通りの活動は到底できるものではなかった。決して成功とは言えないが、最初は緊張していた子どもたちも、回をかさねるごとに笑顔になっていった。準備に多くの時間を費やしている割には、活動の時間があっという間に終わってしまった。

立ち止まって考えている時間はなかったが、常に被災者の私たちがこのような活動をしていいのだろうか、それが何になるのだろうか、という疑問が付きまとっていた。しかし、この活動があったからそ孤独にならずにすんだのだと思う。皆同じ境遇であったため、共に泣いたり笑ったりできる3年間だった。これからの先行きは不安だが、今までの活動で私たちが励まされてきた子どもたちの笑顔のために、微力ながらもサポートを続けていきたいと思う。

嬉しいことがあった。3年目の最後の活動の日、教室に入ると黒板に飾り付けがしてあり、私たちファシリテーターへ子ども達からの感謝の気持ちや楽しかったことなどが書かれた画用紙が貼ってあった。ファシリテーターの私も目頭が熱くなった。今までやってきたことが無駄ではなかったのだと思えた。

夏目陽子さんは・・・  
ピアノの先生であり、  
震災前から大熊町で  
読み聞かせボランティア  
アをしていました。



「 information 」 子ども家庭リソースセンターからのお知らせ



理事長の「ごあいさつ」で既にご案内しておりますが、この度4月に事務所が移転いたします。住所と連絡先は下の囲み記事に詳細記載されておりますので、ご覧ください。北本通りという大きな通りから1歩入った静かな環境です。偶然にもすぐそばに保育園があり、これから多くの親子さんとの交流も楽しい場所です。

2014年度スケジュール

1. NPプレプログラム オリエンテーション 年2回

2014/4/20(日)、2014/10/19(日) 時間は両日ともに13:00～16:00 受講料2,000円 募集中

2. NPファシリテーター養成講座 年4回

- (1)通常講座 第1期 2014/5/17(土),18(日),24(土),25(日) 伊志嶺 美津子 募集中  
 第2期 2014/8/9(土),10(日),16(土),17(日) 永田 陽子 募集中  
 第3期 2014/11/21(金),22(土),23(日),24(月祝) 福川 須美 募集中  
 第4期 2015/2/21(土),22(日),28(土),3月1(日) 伊志嶺 美津子 募集中

(2)出張講座 2013年度は、福島県福島市・郡山市、長野県東御市、などで4回開催

※時間はすべて前半2日間で9:30～16:30、後半2日間で9:30～17:00 会場は子ども家庭リソースセンター。

受講料70,000円(テキスト代2,000円および教材費は別) お申し込みはCFRC事務局まで。

3. NPアフタープログラム 年2回

第1回2014/7/27(日) 第2回 2015年1月の日曜日(未定) 募集中

時間は両日ともに、フォローアップ研修は9:30～12:30、ステップアップ研修は13:30～16:30 会場は子ども家庭リソースセンター。

受講料3,000円

※NPプログラム実施にブランク(～2年間)のある方は、特にご受講をおすすめします。お申し込みはCFRC事務局まで。

4. トボスの会 年4回

2014/6/8(日)、2014/9/14(日)、2014/12/14(日)、2015/3/8(日) 各回とも時間13:00～16:00 会場は子ども家庭リソースセンター。

※トボスの会にご参加希望の方、ご新規入会希望の方は、CFRC事務局まで。

寄付のお願い

被災児の心のサポートプログラム実施のために、ぬいぐるみや材料費、被災地へ出向く交通費等が必要です。

皆さまからのご援助をお願いいたします。

<振り込み先> ゆうちょ銀行にある振り込み用紙から振り込みが可能です。

口座記号・番号 00130-4-651522 加入者名：NPO子ども家庭リソースセンター

～ ご質問、お問い合わせ等は、下記のCFRC事務局まで ～



NPO 法人 子ども家庭リソースセンター (CFRC)

※移転します。

2014年4月1日より下記の住所、電話番号になります。  
メールアドレスは変わりません。

- 所在地 〒114-0002 東京都北区王子 2-18-12 ドムス王子 1階
- TEL/FAX 03-6755-2855
- E-mail info@kodomokatei.com
- URL http://kodomokatei.com/
- 交通機関 JR線「王子駅」下車 北口から徒歩8分  
東京メトロ南北線「王子駅」下車 5番出口から徒歩7分  
都電荒川線「王子駅」下車 徒歩10分

○編集後記 2月号ながら、今や桜前線の北上に伴った花便りが聞こえてきます。このお便りも、皆様の目に触れてお一人ひとりのお心に響けば幸いです。(S)

編集：NPO法人子ども家庭リソースセンター  
 発行：NPO法人子ども家庭リソースセンター  
 発行日：2014年2月10日

